

## 呪具「感覚共有」

男子学生のA君は御曹司として何不自由なく育てられた結果、それはそれはワガママに育った。欲しい物は願えば手に入るし、気に入らない事があれば金に物を言わせて解決してきた。

Aは親が大金持ちだということもあつてか、他人を勝手に見下す傾向にあつた。お金があるだけで偉いとは限らなかつたりするのだが、それを指摘できる人は残念ながいなかつた。

そんなAでも手に入らないモノがあつた。

同じ学校に通う女子校生のEさんだ。

彼女は学年こそ同じだが、別のクラスに所属しており、Aにとつては接点の持ちにくい存在だつた。

御曹司として育てられてきたAは欲しい物は何でも手に入つてきたが、当然ながらお金で手に入らないモノも存在することを知らない。

彼はどうかしてEを手に入れられないか思案し、何時もの用に金で解決しようとした。しかし、ここは裕福な子女の通う学校。Eは金銭で困る事は無い。

ならば容姿はどうだろうか？

Aは顔の作りは悪くない。10人いたら半数以上は美形だと褒めそやすだろう。

しかし、声をかけてアプローチしても良い返事は返つてこなかつた。

Aにとつて金で買えないモノなど無いと思つていた。しかしそれは大きな勘違いだつた。

金で買えない物があるという事を知つたAは、何があんでもEを手に入れる為に行動を開始した。

まず手始めにEの父が経営する会社のパーティーに参加し、そこで仲良くなる様に取り計らい、Eへ近づく事を実行しようとしたが、父がそれにダメ出した。

「偵察ならまだしも、仲良くなるだろ？ いかん。いかんぞ、A。E社と言つたら、我が社のライバルではないか。ライバル社は倒す物だ。そんな輩と仲良くなる事など許せるものか」

Aに対して比較的甘い父であつたが、いざ仕事の事になると、テコでも動かない頑固者になる。

しかし、手に入らなければよけいに欲しくなるのがAであつた。

「いや、お父さんにも困つたものだ。仕事の事になるとコレだ。これでは、現代のロミオとジュリエットだよ」

動かない父をどう動かすか学校からの帰宅中に悩むAであったが、そんな彼の視線にある者が映る。

「ん？あれは……おい、車を止めろ」

Aに言われ運転手は車を停める。Aは車を降りて道に戻ると、ケータイを取り出し構える。

ケータイの先では男子学生がネコと戯れていた。だが、よく観察すれば、男子学生の手元が発光しているのがわかる。しかし、その光はカメラ等の光とは決定的に違う物であった。

（あれは、霊能力？あんな奴が能力者なのか？）

Aの父の会社は大企業だけあって敵も多い。物理的な嫌がらせ以外にも霊能力を使った嫌がらせや呪い等も一度や二度ではなかった。しかし、それらは全て金にモノを言わせて雇った霊能力者達によつて防がれた。

そんな物を見て育ったからなのか、Aはある程度霊感的な物が備わっていた。

そんなAだから、男子学生からそういう物をあまり感じていなかった。

それよりも、男子学生の隣にいる人物。ハンチング帽に糸目で胡散臭い笑顔を浮かべる男が霊能力者ではと怪しんでいた。

Aはケータイで写真を撮ると、運転手に探すよう命じる。

「おい、あいつを調べろ」

「あの男は？」

「多分、霊能力者だ。雑種のネコをコントロールする何かを持ってたみたいだからね。もしかしたら、もつと良い物があるかもしれない」

「わかりました。帰りましたら、搜索を手配します」

運転手の言葉に満面の笑みを浮かべるA。

「くっくく……あの能力、俺が有効に使つてやるよ」

それから数日、Aの元に男の情報が届いた。

どうやら、呪具を専門に販売する『物売り』というネームでフリーの霊能力者をしているらしい。

しかも、金さえ出せば霊能の素人にも呪具を売るといふ。

「所詮は金が全てか。やはり、世の中は金だな」

Aは受け取った資料を読み終えるの同時に、Aの部下である黒服の男は話し出す。

「物売りに買い取りを申し出た所、本人以外には売らないと断られてしまい……」

「まあ、そうなるよね。それで、何処に行けば会える？」

「物売りは○○公園で待っているそうです」

「わかった」

黒服に案内され物売りがいる場所へと向かう。そこは人気のない寂れた公園であった。

しばらく進むと、ハンチング帽に糸目で胡散臭い笑顔を浮かべる男がベンチに座っているのが見えてきた。

男はAの姿を確認すると立ち上がり、挨拶をする。

「初めまして、お客様。自分は人を幸せにする物売りです。本日はどのようなご要件でしょうか？」

「ふん。お世辞はいい。貴様の売っている呪具に人を操る物はあるか？」

「もちろんございます。催眠や洗脳、それから惚れ薬に媚薬。本来ならお取り扱いしているのですが、あいにく品切れ中です」

「金なら出す。用意しろ」

「そう言われましても、中々材料を集めるのが大変なのですよ」

いわく、霊能法が改正され人を操る霊葉や呪具の取り扱い。さらにはその材料を持つだけでも取締の対象になり、裏社会でも在庫を抱える者はあまり居らず、価格が高騰しているそうだ。

「だからどうした？金ならいくらでも出すと言っているんだ。用意しろ」

「……かしこまりました。ご用意いたします。ですが、お客様を手ぶらでお帰しするのは自分の沽券に関わりません。お手数ですが、使いたいお相手の事を教えてもらえないでしょうか？」

Aはとくに気にする事なく、Eを自分のモノにしたい事を伝える。それを聞き物売りは何度かうなずくと、持っているリュックからピンク色の筒を取り出しAへ渡す。

「なんだコレは？」

「オナホでございます」

オナホ。男性が1人で、もしくは他人の手によって性的快楽を得るものである。

「見ればわかる。こんな物が何になると言うのだ！」

「まあまあ、怒らずに聞いてください。こちら、ただのオナホではありません。相手と感覚を共有する呪具になります」

「へえ。面白そう」

Aは受け取ったオナホをジッと見つめながら物売りの説明を聞く。

- ・ 使用する為には、相手に繋がる物。例えば髪の毛等が必要。そうする事で相手と感覚共有する事ができる。
- ・ 触れたり何かを挿入することで、それと結び付けられた相手側にも同じ刺激が与えられる。
- ・ 逆に相手側の刺激への反応や締め付けがオナホを通して自分側に伝えられる。
- ・ 相手が濡れるとオナホにも反映され、潤滑液を分泌する。
- ・ 中に出してもモノはオナホ側に留まるので、妊娠や病気の恐れがない。
- ・ 秘裂だけでなく、口や穴も共有化が可能。

「いいね。それで、値段は？」

「お客様の必要な品をご用意するまでの代替え品です。代金は必要ございません。それと、品をご用意した時の連絡先をお願いします」

「わかった」

Aは物売りが用意した紙にプライベート用の連絡先を記入する。

「ありがとうございます。何かございましたら、こちらのご連絡先をお願いします」

Aは物売りから渡された名刺を受け取り場を去る。

「……やはり、靈感は正しかったようですね」

この前、ある男子学生に破格で催眠人形を売ったが、あんな事をすれば破産というレベルではない損害だ。それなのに何故売ったかといえば、元が取れると靈感が告げたからである。

「彼とは良い関係を築かないとすね」

その言葉だけを残し、物売りは忽然と消えた……

物売りからオナホを受け取った翌日。Aは物を使う為、Eに繋がる何かを入手せねばならない。

別のクラスに所属しているEの物を入力するのは難しい。Aが悩むのも無理はない。

Eが使った物を金で手に入れるのは、貧乏人のやる事なのでAのプライドが許さない。

「さて、どうしたものか……」

思案していたAであったが、チャンスという物は思いがけない所からやってくる物であった。Aが教室に入ると、女子学生達の話しが聞こえてきたのだ。

「ねえ、次の授業なんだっけ？」

「ん？ああ……確かダンスの合同練習だった筈だよ」

それを聞いた瞬間、Aは心の中で歓喜する。Eの髪の毛を入手するチャンスだと。

それなりに古い学校なので華族的な伝統が授業にいくつか残っている。ダンスもその1つだ。

「ねえねえ、誰と組む？」

「私、あの人が良いなあ」

誰と踊るか話あう生徒達をよそに、AはEを誘う為に声をかける。

「Eさん。よかつたら、次俺と踊ってくれないか？」

「え？……はい。私で良ければ」

Eの手を取り、中央に移動すると他の生徒達と一緒に曲にあわせて踊るAは、その様子を見ていた男子学生達からの小声を聞く。

「見ろよ、Eさんと踊ってるぞ」

「いいな。憧れのEさんと踊れるなんて……」

「ボクが誘った時は断つたのに、なんでアイツだけ……」

Aは自分を見る男子学生達を見て、優越感に浸る中、彼女に気付かれないよう髪の毛を1本抜き取る為、足を踏んだフリをして転ばす。

「おっと……すまないEさん」

Aは倒れそうになるEを支えるその拍子に彼女から髪の毛を抜き取る。

「あ、いえ。大丈夫です」

Eは特に気にした様子はなかった。

(よし、気づかれないな)

これで準備は終わった。後は、物売りから渡された物を試すだけだ。

その日の夜。AはオナホにEの髪の毛をセットすると、ただ筒でしかなかった物がまるで女性のそれと同じ形へと変えていく。

「これがEさんの……」

サーモンピンク色をした秘裂を観察しながら、Aは自分の竿が固くなっていくの理解する。

「こんな気分になるのは、始めて女を抱いた時くらいだよ」

Aは手順通りにオナホの中にローション流し入れ濡らすと、自分のモノを入れる。

すると、それに連動してオナホの締め付けがA自身の竿に刺激を与える。その刺激は蜜壺とまったく同じであった。

(流石は物売りだな)

感覚共有オナホを楽しみながら、Aはそれからしばらく使い続けるのだった。

「はあ……やつと終わった」

習い事を終え、やつと帰宅したEは着替えるのもそこにベッドに倒れ込む。

息の詰まる生活。その息苦しい現実こそ、彼女の生きる場所だった。

「こんな家、出て行きたい……」

弱音を吐くE。だが、彼女が家から出る事は多分叶わないだろう。

Eの父親は大企業の社長なのだ。その跡取りである彼女が家を出るとあらば、世間体が悪すぎるし彼女の立場も危うくなるだろう。

「あ……憂鬱」

母親が居れば愚痴をこぼす事もできただろうが、今この家には自分しかいない為それも出来ない。

「ん？」

そんな時だ。Eは何か柔らかい物が下腹部に当たる感触を覚える。

「何なの？」

Eは起き上がり、お尻の下を見るが何もなし、立っているのに柔らかい物が下腹部に当たっている感触は続いている。

「え？何これ……」

Eはスカートを持ち上げ下着に触れるがそれがそこにも何も無い。

しかも、E自身の手で触っているという感覚も無いのだ。

「何なの？これ？」

Eは怖くなり、部屋の明かりをつける。

明るくなった部屋には何も無かったが、Eは先程と同じ感触を感じる。

Eは思わず飛び上がる。そして、触ってくる物から逃げようと、床に座り込む。

「やだ……何が起きてるの？……ひつ！？」

すると今度は中に細長い物が侵入しようとしてきた。どうにかしようと下腹部を押さえるが、侵入が止まる事はなく内にナニカを注入されてしまう。

「え？嘘でしょ？ちよつと……やめてー！」

Eは急いでトイレに駆け込と便器に座り下着を脱ぐが、特に何もなかった。しかし、それが逆にEの恐怖心を煽り立てる。

「もう……何なのよこれ？」

Eは自身に起きた異変を洗い出す為に、風呂に入り手で秘裂や蜜壺などを触るがやはり何も感じないし、流し込まれた物も無い。

今、自分の身体に何が起きているのか、Eには判断のしようがなかった。

「ちよつと、明日病院に行こうかしら？」

Eがそんな心配をしながら風呂から出ようとした時だ。

「つ！？う……くう……」

身体の内側、下腹部。それも秘裂を押し広げ、蜜壺から熱がこみ上げてくるのを感じる。

「な、何……で？これ、は……」

Eは熱に浮かされた頭で考えるが、そんなモノは1つしか浮かばない。誰かが自分の中に竿を入れてきているのだ。

「うあ……ん……はあ……んんっ」

挿入されているモノは無い。なのに蜜壺には竿の感覚が確かにある。秘裂を確認するがそこに竿なんて見当たらない。下腹部を押さえ、Eは風呂場のタイルに倒れこむ。

「あ……うあ……」

Eは熱のこもった声で悶える。その声を聞く者は誰もいないが、Eにはそれがより恥辱を煽っているように感じられた。

「んく……あつ……や、やめて」

Eは何とかしてこの責めから逃れようと、風呂場から出ようとするが力が入らず立ち上がる事ができない。その間にも竿はEの蜜壺で暴れまわり、彼女の身体を快樂へと落としていく。

「あつ……んつ、はああああ……!!」

Eは腰を反らし絶頂を迎えるのと同時に、蜜壺で暴れる竿も痙攣しソレを放出した。腹の奥で受ける熱はとろけるような刺激をEに与える。

「はあ……はあ……」

Eは絶頂の余韻に身体を震わすが、それで終わりではない。蜜壺で暴れていた竿はまた動き出しEを責め立てる。  
「あうーだ、だめ……今イッたばかり……だからあー」

だが、そんなEの言葉など竿には関係ない。彼女は何度もイカされ、竿が萎えるとようやく抜き取られ解放された。身も心も十分に落ち着かせた後、風呂場からベッドへとふらふらの覚束ぬ足取りで移動する。

「な、なんだっ……たのよ、今の」

身体が熱くて仕方がない。Eは下着も履かずにベッドへ倒れるが、身体の疼きは治らない。それどころかより激しくなっていく。

「うあ……」

Eは自分の秘裂に触れるとトロリとした液体が指先につく。それを確認する為にEは目の前へもっていく。付着した液体は自分の蜜。想像していたモノではなかった。

「……よかった」

安堵感も重なり、Eはまどろみの中意識を手放すのだった。

「……はあ、俺とした事が馬鹿みたいにヤッてしまった」

Aは己の竿をオナホから抜くと、ため息をつきながら呟く。

「いや〜でもこのオナホは凄いな。玉が空っぽだ」

買った女と違うのは解っているが、それでもかなり楽しめる物であった。

「数日溜めて、また楽しむかな」



Aはそんな事を考えながら竿をベッド脇にあるティッシュで拭うとそのまま眠りについた……  
 感覚共有オナホ初体験を終え数週間後、Aはすっかりこのオナホにハマっていた。  
 秘裂はもちろんのこと、口や穴も共有化しEをとことん味わった。

こんな素晴らしい物を渡してくれた物売りに感謝である。  
 中でも楽しめたのは、合同授業の時である。

それは先日の事である。AはどうにかしてEの表情を楽しめないか思索していた。  
 オナホは確かに感覚を共有してくれるが、Eがどういう反応をしているのかわからない。  
 快楽にとろけているのか、それとも恥辱に耐え忍ぶのか、あるいは両方なのか？

「やつぱり顔を見たいよな」

Aは何かないかと何時も嬢を買っているサイトを見てみると、ある企画が目にとまる。

Aはサイトの案内を詳しく読む。どうやら、嬢と散歩を楽しむ物になっているが、ただの散歩では無い。おもちゃを使つての散歩である。

おもちゃを嬢に使うかそれとも自分に使うかは選択であったが、この企画はAに閃きを与えるものとなった。  
 Aはすぐに必要な物を購入すると授業の予定を確かめ、ニヤリと笑う。

「さて、これで準備は整ったな」

そして購入した物が届いたその日。Aはオナホを持って登校するのだった……

Eにとつてこの数週間は地獄のような日々であった。目に見えない竿に襲われてからというもの、夜になると突然蜜壺を突かれるようになったのだ。

初めは数日置きだったが、今では毎日である。ひどい時は口や穴までもである。  
 家で雇っている霊能力者に何かないか聞いてみたが、何も無いと答えられた。

自分に起きている事を話そうとも思ったが、内容が内容だけに話せるわけもなかった。  
 しかし、それも二週間くらいで慣れてしまった。悲しいかな、入れてくる竿は下手くそだったのである。動きも単調でそれがわかってしまつてからは、害もないことから終わるまで耐える方を選ぶようになった。

では、何が地獄かというといけないからである。

相手の竿は満足すると引つ込むが、Eは満足していない。発散できない熱を持って余しながら、夜を過ごすようになった。これが生殺しという奴だ。そんな日々が続くある日の事である……

「ねえEさん、次の授業合同なんだって。しかもA君がいるクラスと！」

「そうなんだ。隣になれるといいね」

クラスメイトと話をしながらも、Eは教科書を準備する。

「でもさ、A君最近雰囲気が変わったよね」

「そう？」

「うん。なんかね……大人になったって感じかな」

クラスメイトの女子はそう言うと、Eから視線を外す。

Eもそれに釣られるように視線を動かすと、そこには講義室へ移動中のAが居た。

こちらに気づいたのかAは手を振るとクラスメイトの女子も手を振り返した。

「A君って、本当カッコいいよね」

「うん……そうだね」

頷きながら答えるEだが、その思考は別の事を考えていた。

(あつ、先生)

講義の為にやって来た教師。Eがこの授業を取った理由の1つ。背が高く、顔も良く、何時も笑顔で自分の相談にも乗ってくれる。親なんかよりも頼りにしている存在。

「では、今日は前回の続きから……」

授業が始まり、Aは教師の話聞きながらも視線はEへと向ける。

そして、この為に用意した女性用突き出しデイルド(バイブレーター機能付き)をオナホに取り付け、抜けないようしっかりと固定するとカバンに隠す。

突然下腹部にデイルドを入れられたせいか、Eは驚きの表情を浮かべるが、それもすぐに元の表情へと戻る。

その表情をAはこっそりと写真に撮りそしてそれを自身のパソコンへ送るの。

(さあ、お楽しみはこれからだ)

ケータイを机の中で操作すると、デイルドを遠隔起動する。

「ッ!？」

デイルドの動きが伝わり始めたのだろう。Eは自分の下半身を凝視し、足をしっかりと閉じてデイルドをやり過ぎそうとしていた。

(どこまで我慢できるかな?)

教師の話聞くふりをしながら、Aはケータイの画面を見てどの機能を使おうか思案するのだった。

(な、なんで!?今まで夜にしか来なかったのに!)

突然、下腹部に挿入されるナニカ。しかもそれは振動を始めたのだ。何時もEを突く竿では無い。あきらかに大人のおもちゃに分類される物がEの内に入れられている。

(入れくるモノは、竿だけじゃなかったの!?)

今までEを突くモノは竿だけであった。しかもその竿も下手くそ。性感だけを高めイク事のできない……

しかし、今度の相手は機械だ。無慈悲にEの蜜壺内で振動し、グネグネと揺れ動く。

(だ、ダメ……声が、出ちゃう……)

Eはなんとか声を出すのを我慢するが、それも限界に成りそうな時に、ピタリと動きが止まった。Aの遠隔で止められたのだ。

(と、止まった……)

「それじゃあこの問題を……Eさん解いてもらえるかな？」

デイルドが止まった事に安堵したEだが、それもつかの間。次は教師に問題を解かされる事となる。

Eは立ち上がると黒板の前に移動し、チョークを取ると問題を解き始める……その時を待っていたとばかりに再びデイルドが動きを再開した。

(なんで動き出すの!)

しかも今度はゆっくりではなく激しい動きでだ。

「ッ!」

思わず声を上げそうになるが、何とか堪える事ができた。しかし、こんな状態では問題は解けそうにない。

「どうしたEさん。わからないのか？」

教師が後ろから声をかけてくる。しかし、Eは首を振ることしかできず、振り返る事も出来ないでいた。「解らないなら、仕方が無いな」

そう言う教師はEに席へ戻るよう言う。手を握り、ゆっくり歩きながら席へ戻ろうとするE。そんな彼女へもう一つの機能が襲いかかる。

Aがケータイを操作してデイルドの突き出しで陰核の刺激を始めたのだ。

「ひゃっ!」

Eは突然の事に驚き声を上げるが、それは教師の声によつてかき消される。

「どうした? Eさん」

「な、なんでもない……です……ッ」

なんとか誤魔化そうと震える声でEは答える。

「だが、顔が赤いぞ? 風邪でも引いたのか?」

真っ赤に染めた顔は確かに風邪を引いているようにも見えなくもない。しかしそれは違う。本当は恥辱に耐えているのだ。

(せ、先生の前で……こ、こんな……)

Eは内股になり太ももを擦り合わせるが、二股のデイルドは容赦なく外も内でも激しく動き続ける。

(だ、ダメッ! 動かないでえー!)

機械らしい無慈悲な攻めがEに快楽を与える。羞恥に悶えるEを楽しそうに見ていたAは、他の生徒達の前で絶頂するEを見るためにケータイでデイルドの振動をMaxにした。

(よし! 今だ)

どんな反応をするか見守るが、Eは内股でよろよろと自分の席へ戻っていくだけであった。

(何が起きた? 確かに振動はMaxになつてる筈だ)

こつそりケータイを覗くと、振動は両方ともMaxになつている。Eの感じからしてイツてもおかしくない。それなのに、顔を赤に染め息も荒くしているというのに、イツていないのだ。

(どうしてだ?)

その疑問に答えが見つかる前にAは授業の終わりを告げるチャイムによつて思考を中断された。

「それじゃあ今日はここまで。しつかり復習するように」

Aは授業が終わりざわつく生徒達の声を聞きながらも、思考は別の事を考えていた……

授業が終わり休み時間になると同時にEは自分の席で荒い呼吸を繰り返して何とか耐え抜いた事を安堵する。

授業中に突如、しかもタイミングよく動くおもちゃの攻めに絶頂寸前まで快楽を与えられたが、それは同じく突如として終わった。

(今はなんと耐えたけど、これから昼間にこんな事があつたら、生活なんてできない……)

スカートの裾を握りながらEはこれを何とかして止める方法はないかと考えるが、そんな都合のいい方法は思いつかない。そもそも、このおもちゃの攻めが始まった原因も解らないのだ。

(でも……)

Eは深く息を吸い込んで乱れた呼吸を落ち着けようとする。しかし、ここ数日に高められた性感を逃がす事ができずにいた。

(本当はルール違反だけど……)

そう思いながらケータイを操作し、ある人物にメールを送る。しばらくすると返信があり、お昼なら会つても良いとの事だ。

その文に返信すると、Eは熱い吐息を吐きゆつくりと立ち上がる。そしてそのまま教室を出るのだった。

Aはトイレでカバンの中にしまつてあつたオナホを確認する。ビニール袋に入ったそれは、デイルドとオナホの僅かな隙間から潤滑液である愛液が溢れ、Eが感じていたのがわかる。

しかし、デイルドを抜いた中に指を入れると、温もりは無く溢れた愛液も冷たくなっていた。

(なんだこれは！まるでただのオナホじゃないか！)

その日の夕方、Aは物売りへクレームの電話をする。

「おい！これはどういう事だ！」

『おや、何かご不満でも？』

「そうだ！お前の寄越したオナホが機能しなくなつたぞ!!」

『ふむ、どういう状態か聞いてもよろしいでしょうか？』

物売りに言われ、Aはどうしてオナホが感覚共有できなくなつたのかを説明すると、物売りから以外な答えがきた。

『なるほど、それは霊力切れですね。そのオナホが霊力で動いているのは知っていますね？それが尽きた事で機能が停止した

のです』

「なら、すぐに新しい物を用意しろ！」

『それでもよろしいのですが、もっと良い商品にしませんか？』

物売りが言うには感覚共有オナホの上位互換品があり、準備もできているそうだ。

『どうです？』

しばらく悩んだAは、物売りにある事を聞く。

「……初めに注文した品は準備できたか？」

『はい。材料が揃ったので製作中です。来週にはお届けできるかと』

それを聞き、カレンダーを確認してAはニヤリと笑う。

「さっきお前が言っていた上位互換品とまとめて買おう。その変わり、ある場所に届けて欲しい」

Aは物売りにそのある場所へと説明する。それを聞いて物売りはしばらく考えたあと、了承した。

「では来週までに頼む」

『かしこまりました』

Aはケータイを切るとほくそ笑むのだった……

そして時が過ぎ、約束の日となった。

Aが空き教室で待っていると、物売りが大きな箱を抱えてやって来た。

「お待ちせしましたお客様。こちらが注文の品になります」

物売りが箱を開けると、そこには等身大人形が納められていた。

だが、これはただの人形ではない。感覚共有オナホの上位互換、感覚共有ダッチワイフである。

「後はお客様が下腹部に感覚共有オナホを取り付ければ、効果を発揮するように調整してあります」

Aが感覚共有オナホを取り出し、ダッチワイフに取り付けるとその姿をEそっくりに変えていく。

「これは……凄いな」

「これで全身余すことなくお楽しみいただけるようになりました。ですが、ご注意ください。これはもはや等身大の藁人形と言っても同然です。使い方を誤れば惨劇へと変わります」

「ああ、わかつてるよ」

物売りの言葉を活半分に聞きながら、Aはこの感覚共有ダッチワイフの使い心地を想像する。

全身の感覚どころか、声や表情もあるというのだ。今からEが快楽に蕩けるのが楽しみでならない。

「それから、媚薬ローションです」

渡されたのは、Aが初めに注文した人を操れる霊薬だ。

「コレを秘製に塗り込み、お客様の竿を入れてイかせれば、二度と他の男の竿でイク事のできない形状記憶を施す事ができます。ではお客様。お代を……」

Aは電子決済で送金を済ませると、教室を出て学園祭へと戻る。

そう、今日は学園祭最終日。この後は後夜祭だ。Aの計画では、この後Eを呼び出し、本人と感覚共有ダッチワイフを混じえての3Pをするつもりだ。

感覚共有ダッチワイフを隠し、物売りから受け取った媚薬ローションをポケットの中に突っ込み、Aは自分の教室へと戻った……

学園祭は終わり後夜祭の時間。多くの学生達は校庭に集まり思い思いの時を過ごしている。

AはEを連れて行く為を探す、彼女の教室には居なかった。よくEと一緒にいる女子達とも居ない。

そのまま後夜祭を楽しみながらもEを探していると、時計は18時を指していた。後夜祭も終わりを迎え、生徒達が次々と校門から出て帰路に着く中、AはまだEを探していた。

(どこだ？どこに居るんだ？)

もう帰ってしまったのだろうか？そんな事を考えていると、1人の女子生徒が話しかけてきた。

「あ、あのA君。この後、一緒に帰らない？」

「ああ、ごめんね。今、Eさんを探しているんだ。どこかで見なかったかな？」

「……それなら、用具室に備品をしまう手伝いをするって言ってみました」

「ありがとう。行ってみるよ」

Aは女子学生に礼を言ってお用具室がある校舎へと向かう。

運の良い事にその校舎には感覚共有ダッチワイフも隠してある。

用具室の近くに來ると、明かりはついておらず、作業をしているという雰囲気ではなかった。

（おかしいな。Eさんは備品をしまう手伝いをしてるって聞いたんだが入れ違いになったか？）

だが、用具室がある校舎は一本道でEがどこかに寄り道でもしない限り入れ違う事はない。

道に戻るかどうか悩んでいると、用具室から音が聞こえたような気がした。

よく耳を澄ませばEと誰かの声がある。しかし、扉越しではよく聞こえないので、扉を少し開けAは用具室の外から中の様子伺うと、中ではEともう1人が抱きあっていた。

（まさか！）

まさしく逢引現場である。自分が好いていたEが、まさか知らない男ともう付き合っていたとは思ひもなかった。

（ふざけるな！最初にEへ目をつけたのは俺だ。何処の誰が取ったんだ！）

憤りを覚えるが、復讐するにしても相手がわかかなければ意味がない。Aは扉の隙間から誰なのかを確認する。

2人が離れたことで、Eと抱きあっていた人物がはつきりとわかった。

「せ、先生。ダメだよ学校で……」

「何言ってるだ。最初にルールを破ったのはEだろう？」

「あ、あれは、身体が疼いて仕方なく……」

（アイツは、講義に来てた教師じゃないか。いや、今はそんな事はどうでもいい！）

教師とEの情事を見てしまったAは怒りでどうになかってしまいそうだが、何とか堪える。

（落ち着け……今、ここで飛び出しても勝ち目は無い。それに、2人の関係を知っていればもつといい方法が思いつくかもしれない）

Aはそう考え用具室から離れると、感覚共有ダッチワイフが隠してある教室へ行き感覚共有オナホを取り付けると、物売りから買った媚薬ローションをポケットから取り出し秘裂へ塗り込んだ。

「こいつで、あの2人の関係をバラバラにしてやる」

Aは不敵な笑みを浮かべると、感覚共有ダッチワイフを抱きかかえた……

「あ、あれは、身体が疼いて仕方なく……んむっ！」

教師はEの唇を己の唇で塞ぐと、Eの身体を抱きしめる。

教師の舌はEの唇を押し開け口内を蹂躪すると、自らの唾液をEの口内へ流し込んでいく。



Eはそれを抵抗することなく受け入れた。

数十秒の口づけが終わると、2人はどちらからともなく離れるが唇の間には透明な橋が架かっている。

教師はキスだけで蕩けてしまったEの頭を優しく撫でる。

「授業受けてる間、顔真っ赤だったし十二をしてたのかな？」

「それは……」

「言い訳はダメだよ」

制服の上から胸を揉みしだきながら、教師はEの首筋にキスをする。

その軽い刺激ですらもEは身体を震わせてしまう。

Eは自分の胸を揉んでいる手を掴むとそれを自らの秘裂へと誘った。

既に下着の上からでも分かるほど濡れているそこは、少し触れるだけで水音を立てる。

しかし、教師はその手をゆっくりと振りほどくと、Eの胸に指を円を描くように這わせてながら耳元で囁く。

「学校でやりたいって言い出す前は、全然会ってもくれなかったじゃないか。その間、何があつたのかちやんと答えないと、続けてあげないよ？」

けして敏感は所へは触れない教師の手つきにEは焦らされ、早く触って欲しいと懇願する。

「せ、先生……お願いだから、もっと強くして……」

Eは自ら腰を動かして教師の腰へ擦り付けるが、教師はそれを無視して胸への愛撫を続ける。

「ちやんと言えたらご褒美をあげるから」

Eの胸を揉みながら耳を舐めると、Eの口から甘い吐息が漏れる。

「言うからーちやんと言うからあー」

Eは目に涙を浮かべて叫ぶように答える。その答えに満足したのか教師は手を止める。

そしてEは自分の身に何が起きたのかを全て教師に話した。

「ふーん。見えない筈、ねえ？もしかしてEはそれが良くなっちゃって、俺よりそっちの方がいいって事なのかな？」

「そ、そんな訳無いよー」

Eが教師の言葉を否定すると、教師はEを立たせてスカートの中に手を入れて下着の上から秘裂を撫でる。そして割れ目に人差し指を当てて上下に動かした。

「あつ！あつ！」

湿った音がEの耳に入る。教師は指の動きを止める事なくゆっくり動かし続けると、Eの口から嬌声があがる。その声を聞いているだけで、教師も自分のモノが熱くなつていくのを感じていた。

「じゃあ、なんで会つてくれなかったの？」

「そ、それ……あつ！」

「それは？」

「そ、外に出て……誰かと、会っている時に……突然犯されてもしたらあ……そう考えると、ああああつ！」

教師は更に激しく指を動かしEを攻め立てる。秘裂の割れ目をなぞるだけだった指が徐々に上へと移動すると、布地の上からでもわかるほど存在を主張する陰核を優しく撫でた。

Eはそれだけで軽く達してしまいそうになるが、教師は指を止めそれを許さない。

「それで？」

「だ、だからあ……ひあつ！ああつ！せ、先生の前で犯されるの……んんっ！あ……だから」

その話しを聞き教師は合点がいった。この前の授業で妙にモジモジしていたのは、そういう事だったのかと。

「それは怖かったね、E。でも、君が話してくれたから、これからは2人で考えて対策を……」

教師はEの頭を撫でながら彼女を慰めていると、Eは何から逃げようと、しかし誘うように腰を動かしていた。

「先生え……そ、そんな触ったら、とんじや、とんじやうっからあつ！」

「何を言ってるんだ？俺は触ってないぞ？」

「あつ！そんな、嘘……だつ、ああつ！だめえ……、こねないでえつ！」

2人が知らない事だったが、Aが感覚共有ダツチワイフに媚薬ローションを塗つてまさぐり始めたのだ。

（よくわからないが、これは擬似的な3Pって事か）

だが、わからないなりに、教師は自分を透過してEをもて遊ぶ第三者が居るのを理解する。

「E、どうやら俺達が仲良くしているのに嫉妬して、君を襲っていた幽霊が出てきたらしい」

「え？そ、それって」

「安心しろ……今からそいつをやっつけてあげるから」

教師はそう言うが、幽霊が見えたり霊能力がある訳では無い。方便で言うてるだけで、ただやりたいだけである。しかし、

今回はそれが功を奏したりした。

「それで、そいつはEのどこを触ってるのかな？ 教えてもらわない事には、君がどうなつても手が出せないよ？」

教師の指先がEの肌をなぞる。だが、感覚共有ダッチワイフに媚薬ローションを塗られたEの身体は、その僅かな刺激でも達してしまいそうになっていた。

「ああつ……わ、私のアソコを、指で……こねてます……っ」

「なるほど。教えてくれてありがとう。今その手を払うよ」

教師はEの太腿から指を這わせながら上げていき脚のつけ根まで持つていくと、そこからショーツ越しに手のひら全体を使つて秘裂を揉みしだく。

「ああつーそれ、ダメっ！」

Eは教師にしがみつき快樂に耐えようとするが、秘裂からは水音が大きくなっていく。

「E。凄いね……もうこんなに濡れてるよ？」

「やだあ……言わないでえっ」

クロッチ部分が愛液でびしょ濡れになっているのを見ると、教師はショーツを横にずらし、秘裂に中指を挿入するとゆつくりと動かし始める。

Eの膣内は熱く蕩けており、教師の指を締め付けてくる。十分濡れているとわかった教師は、指をまげて緩急をつけ蜜壺を蹂躪する。もちろん、Gスポットの刺激も忘れない。

「んああつーあう……な、なに？ これえ……ゆ、指が、指が何本も入つてくるっ!? や、やめっ……今、胸触らないで！」

そしてEは教師の指とAの感覚共有ダッチワイフよる指の攻めに立っている事ができず、教師にしなだれかかる。

「今度は胸にもか。イヤらしいヤツだな」

教師はEの腰に腕を回すと、机の上に乗せて座らせる。

そして蜜壺を刺激しながら片手で制服を脱がす器用な事をやる。

「そつちが胸を触るなら、こつちもマッサージ除霊だ。E、どつちの胸を触られてる？」

「あ、ああつーわからなつ……どつちも気持ちよくてえ……はああつ！」

「まあ、適当に選ぶか」

EのYシャツのボタンを外しブラが露わになると、そのホックを外し中へ手を侵入させ、手の平全体で乳房を掴む。教師は



し、しらなアツ!!」

2人の男から同じ場所を攻め立てられるという体験した事のない刺激は、Eを簡単に限界へと導く。しかし、教師の方も以外にも限界を迎えようとしていた。

(……こいつ凄いな。まるで、別の生き物が膣内にもう一つあるみたいだ!)

感覚共有により今Eの蜜壺には竿が2本ある。お互いにまるでフェンシングをするかのように動き、蜜壺内は今までにないほど動いている。

普通なら、こんな事をされれば痛いではすまない。だが、Aの塗りたくった媚薬ローションでEは性感を極限まで高められており、痛みは快樂へと変換されている。

「E!」

「あつ!はあ!んはあつ!」

「そのまま聞け。どっちの竿がいい?俺のと、幽霊の竿。どっちが気持ちいい?」

教師はEの腰を掴み更に激しく動かすと、どっちのモノが良いかEに聞く。快樂で上手く思考できないながらも、Eはその答えをのべる。

「こ、これがいいっ!こっちの方が気持ちいいですツ!!」

「俺のが?なら、幽霊にしっかり教えてやれ。誰の竿が気持ちいいか!」

「せ、先生!先生のがいいっ!先生の竿が気持ちいい!!」

Eはそう言う教師の首に腕を回して抱きつく唇を重ねる。そして教師もEに答えるように舌を絡めていく。

「んちゅ……んんっ」

「ぶはあ……E……」

「せ、せんせえ……」

キスをしながら教師は腰を動かす速度を早めると、2人の限界が近づく。

「ああつ!だめえ!はっ、やっ……あああつ!!」

Eが達した事により蜜壺内が激しく痙攣し、それに搾り取られるように教師も精を吐き出した。

「はあ……はあ……」

Eの薄く開いた唇から熱い吐息が漏れる。それは熱病にでも罹ったかのように熱く甘い。教師は、まだ意識のはっきりし

ないEを机に寝かせる。そして膾内から自分の竿を抜き、ティッシュで拭いてからズボンを穿くと用具室を見渡す。

「少し激しくすぎたな。Eのシヨーツが見当たらない……」

明かりをつけるわけにもいかないので、暗い中ケータイの明かりを頼りにシヨーツを探すのだった……

「なんで、なんで、なんでなんだよ!!」

Aは激昂した。こんな事になる筈じゃなかった。ただ、ちょっとわからせてやるつもりでやっただけだったのに、どうしてこうなったのか理解できなかったのだ。

初めはよかった。Aの攻めにEも反応し声をあげた。

『あつーそんな、嘘……だつ、ああつーだめえ……、こねないでえつ!!』

『ああつ……わ、私のアソコを、指で……こねてます……つ』

『ああつーそれ、ダメっ!!』

感覚共有ダッチワイフから紡がれるEの声は大変艶やかでAを満足させるものだった。

(これでの教師とEの関係も壊れたな!これでEは俺のモノだ!)

Aの塗りたくった媚薬ローションの効果もあり秘裂からは愛液が溢れ出ていた。

恐ろしいまでに本物そっくりな構造に、Aは胸を揉みしだく。

『ひいんっ!あつーあああつ!!やあつ!!ちくびっ!だめえつ!!』

『あああつーイッたつ……イキましたからあつ!!』

Aのテクニクにより、さらに声を荒げるEは愛撫だけで達した。

コレにトドメをさすべく、Aはズボンを脱ぎ、自分の竿をEの秘裂へ押し当て挿入する。

するとどうだ!

『んああつーあう……な、なに?これえ……な、なにか、また……入ってえ!!ぎ、竿があ!竿が2本ある?!くうつ!あうつ、つあ、あ……ツ!だめえ、だ、だめえ、だめえ、だめえ、だめえつ!!こ……こんなの、し、しらなアツ!!』

「バカな!あの教師、この状態で挿入れやがったのか!」

感覚共有によりEの蜜壺には竿が2本ある。お互いにまるでフェンシングをするかのように動き、蜜壺内は今までにないほど動いている。

そんな時、物売りの言葉が脳裏によぎる。

「コレを秘裂に塗り込み、お客様の竿を入れてイかせれば、二度と他の男の竿でイク事のできない形状記憶を施す事ができま  
す」

『あつ！あつ！だめえ……あつ！はあ！んはあつ！』

「やめろつ！俺の竿でイけッ!!」

Aは必死に腰を動かし、Eをイカせるため攻め立てる。

それに対抗するかのようにもう一つの竿、そう教師の竿が蜜壺を押し広げるように動く。

Aも自分の力りでGスポットを刺激しEを屈服させようとする。その甲斐があつたのかEは達した。

『こ、これがいいっ！こつちの方が気持ちいいですッ!!』

「やつた！やつたぞ！ザマアみろ！」

Eが自分の竿に屈服したと思ひ喜ぶAだったが、次に紡がれた声に絶望する。

『せ、先生！先生のがいいっ！先生の竿が気持ちいい!!』

「なつー！」

Aは教師の竿に負けたのだった。

だが、そんな現実を認めたくはなかつた。だから必死に腰を振り続けた。

『あつ！はあ！んはあつ！』

「だまされんな！イけつ!!イつちまえ!!」

AはEが達しそうになるたびにそう叫ぶと、その度に少しではあるが精を吐き出す。それはまさに負け犬の遠吠えそのものだった……

『んちゅ……んんつ。せ、せんせえ……』

唇から漏れるのは教師とのキスの音。Aとでは無い。

そして無情にもその時は訪れる。

Eの蜜壺内が激しく痙攣し、それを搾り取ろうとする。Aのでは無い、教師の竿の方だ。Aの竿は蜜壺内で萎え、精を吐き出す事はなかつた。

『はあ……はあ……』

感覚共有ダツチワイフの薄く開いた唇から熱い吐息が漏れる。それは熱病にでも罹ったかのように熱く甘い。しかし、それはなにもかも無意味な物だ。

媚薬ローションの効果で、今Eを抱いている教師の竿を覚えてしまったのだ。もう二度とEはAの竿で満足できない身体へととなってしまったのだ。

「ふぎけるなっ!!」なんて、俺のモノを受け入れられない!!それどころか、他の男にイカされやがって!!」

怒りが激しい波のように全身に広がっているAへさらに怒りを煽る光景が飛び込む。

感覚共有ダツチワイフの秘裂から白濁液が漏れてきたのだ。

普通に考えれば、それが白濁液では無いのがわかる。Aは精を吐き出していないのだから。それはただ、光の加減でそういう風に見えただけである。

しかし、怒り狂えるAには教師の注いだ物に見えてしまった。

そして……

「うわっ!!」

誰かの忘れたハサミを掴むと、全力で感覚共有ダツチワイフへ振り下ろす。

「くそおっ!畜生っ!!」

Aはハサミを引き抜き何度も何度も切りつけ、精巧に作られたそれを破壊する。

次第に息が切れ始め手が止まり、刃先がボロボロになったハサミを投げ捨てるとドアを蹴破り教室を後にしようとした。

「お客様、大変な事をしてくれましたね」

怒りすら衰える程恐ろしい声が聞こえた。

声のした方を向くと、そこには物売りが居た。

「お、お前、どうやって……」

「お客様、言いましたよね?使い方を誤れば惨劇へと変わります。と」

「そ、そうだ!お前が変なローションを売りつけるから、こんな事に……」

Aは責任転嫁するべく物売りに詰め寄るが、物売りの鋭い視線に射すくめられる。

「お客様、商品を渡す前にちゃんと説明しましたよね?この商品は感覚を共有するのです。等身大の藁人形と言っても同然だと。そして今、お客様は何をなさいました?」



怒気を含む物売りの言葉に、Aは恐る恐る背後を振り向く。

そこには赤い液体を流す感覚共有ダッチワイフがあった。それはつまり……

「お客様、貴方はこの商品を破壊なさいました。それはつまり、この商品で感覚共有されてる方が同じ痛みを受けているという事です」

そう、Eはハサミでスタスタに切り裂かれたのだ。他ならぬAの手によって。

Aは急いで感覚共有ダッチワイフに駆け寄ると、ハサミで切り裂いた部分をふさごうとする。しかし、傷はふさがらない。「お客様、その商品はもう壊れていますよ」

物売りの言葉も耳に入らず、Aは必死に傷をふさごうとする。

「さて、お客様。貴方との関係はこれで、終わりとさせていただきます」

「ちよ、ちよと待つてくれ！なあ、あんななら、この傷をふせぐ薬とか持つてるんだろ？そいつを売つてくれよ。頼むよ、金ならいくらでも出すから！」

そう言つてAは何も書いていない小切手を出し物売りに握らせる。

「あなたの好きな値を書いて良い。それで薬を売つてくれ！」

「申し訳ありませんが、呪殺に関わるのはご法度となっております。それではお客様、もう二度と会う事は無いでしょう」

その言葉と共に物売りは闇の中へと消えていく……

「あは！あはははは！！アハハハハハハハハ！！ああ、そうだ……俺は悪くない……悪いのはEだ！Eが俺を裏切つたんだ！」

Aは廊下で狂つたように笑い出す。そして、壊れた感覚共有ダッチワイフを担ぐとフラフラと歩き出す。

（証拠さえ隠滅してしまえば、誰にもバレやしない。それに世の中金だ。金を積んで、あの教師がやった事にしよう）

Aはそんな事を考えながら、夜の闇へと消えていく。

しかし、翌日。Aは逮捕されていた。

呪殺未遂の容疑で。

あの後、完全に感覚共有ダッチワイフを燃やして川に流したのだ。しかも、誰にも見られる事なくだ。それなのにAは留置場に身柄を拘束されていた。

面会に来た父親になんとか出してもらうように頼むが、父の表情は険しいものだった。

「なんて事をしてくれたんだA！お前のせいで我が社の信用は台無しだ！」

「俺はやつて無い！やつて無いんだ！俺じゃない！！やつたの講義に来てる教師だ！」  
「嘘ですね」

必死に父に訴えるAの声を美しい女性の声が遮る。

声のした方を見ると、白衣に緋袴といういかにもな姿の巫女がやって来た。しかし、その頭にはキツネの耳があった。

「おお、これは狐巫女様。こんな場所へお越しいただき有難うございます」

父の態度と口調から、この女性が権力者だという事がわかった。

「はい。呪詛の気配を感じたので……。貴方ですね？呪詛を行ったのは」

狐巫女の視線がAへと向けられるがAはそれを睨み返した。その視線を気にも止めず狐巫女は話を続けた。

「さて、これは困りましたね……。まさか呪殺未遂をされるとは……」  
「違います！俺はやつてない！！」

Aの声は虚しく留置場に響き渡るが、狐巫女が指を鳴らすと壊した筈の感覚共有ダッチワイが現れた。

「そ、それは!？」

「これに見覚えがありますね？この人形からは被害者の髪の毛と貴方のDNA及び霊力が検知されています。どう言おうと言い逃れはできません」

Aが壊した筈の感覚共有ダッチワイは、霊能のスペシャリスト達によって復元されていたのだ。

しかし、先ほどから気になる事を言っていた。呪殺未遂とはなんなのか？

「気になりますか？生きてますよ、Eさんは」

まるで心を読んだかのように狐巫女は答えると、話を続ける。

ハサミで刺されたEは、たまたま用具室へ訪れた教師によつて発見され、手当てが間に合い一命を取り留めたのだ。

「さて……。貴方をどうするか……」

狐巫女の視線に力が入ると、Aは震えだした。

「や、やめてくれ！頼む！俺はまだ死にたくない!!」

Aは泣き叫ぶが、狐巫女はそれを気にも止めない。

「貴方には呪殺未遂の他に違法霊薬の使用の嫌疑もあります。それを何処で手に入れたのかも話してもらいますよ」

「な、なんの話だ！俺はそんなもの知らないっ!!」

Aの声が留置場に響くが、狐巫女は無視をして話を続けた。

「まあ、貴方は知らなかったとしても調べればすぐわかる事です。どちらにせよ」

そこで言葉を切るとAの震えはさらに増し、恐怖で呼吸が浅くなる。そして……

「呪詛を行った者には罰を与えねばなりませんから……」

狐巫女の言葉と共にAの意識は闇へと落ちていったのだった。

それから数日後。Aは霊能専門の刑務所へと入れられた。

表向きには、痴情のもつれによりEを刺した事になっているが、裏では霊能法により裁かれ、二度と刑務所から出られぬ刑罰を課せられた……